

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22500543

研究課題名（和文）教員養成課程における間身体コミュニケーション力育成のための評価システムの構築

研究課題名（英文）A Construction of Assessment System of Physical Education Class : For Improvement of communication through bodies of Teacher Training Course Students

研究代表者

廣兼 志保 (HIROKANE SHIHO)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：00234021

研究成果の概要（和文）：本研究は、教員養成課程の大学生を対象に、間身体コミュニケーション力を育成する体育授業のための評価システムの構築をめざして、自己評価活動及び相互評価活動と評価ツールを活用した研究授業を行った。その結果、学習者は、授業における個々の活動の意味を理解して主体的に授業に取り組むことができ、また、教材の特性に応じて、グループ活動を活性化させるための行動や言葉かけを工夫し行うことができるようになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to construct of assessment system of Physical Education class. We planned and performed the experimental lessons which utilized self-assessment activity and peer-assessment activity, and evaluation tools. As a result, the following facts became clear. After these lessons, students were able to understand the meaning of each activity in lessons, and could tackle lessons actively. And students could carry out devising the action or the language to activate group activity according to the characteristic of teaching materials.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，身体教育学

キーワード：体育授業・教員養成課程・間身体コミュニケーション・評価

体ほぐし・レクリエーションゲーム・レクリエーションダンス

1. 研究開始当初の背景

2006年7月の中央教育審議会の答申には、教員に求められる資質能力の項目において、優れた教師の条件として「豊かな人間性や社

会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質、教職員全体と同僚として協力していくこと」が示されており、2008年1月の中

央教育審議会の答申では、学習指導要領の改善の基本方針として、体育において「集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」が示されている。

このように、学校教育現場、特に、体育科教育においてはコミュニケーション能力の育成は今日的課題であり、教師教育においても身体活動を通じたコミュニケーション能力、特に仲間意識を持って協同的に行動する力の育成は急務であるといえる。

筆者らは、教員養成課程大学1年生を対象に、間身体コミュニケーション力と同僚性の育成を促す体育授業のプログラム開発に取り組んできた(廣兼・大橋 2007, 2008, 2009)。その結果、「体ほぐし」「レクリエーションゲーム」「レクリエーションダンス」の活動を用いた教育プログラムを構築することができた。しかし、作成された教育プログラムにふさわしい評価システムの構築については、まだ開発途上であり、早急な検討が求められている。そこで、本研究では、その構築に取り組むこととした。

2. 研究の目的

本研究は、教員養成課程入門期の大学生を対象に、教師として必要な「児童・生徒が体の姿勢・表情・行動などを通して意識的・無意識的に発信する心の声を受け取り応答するからだの力(以下、本研究では、これを「間身体コミュニケーション力」と称する)」及び「仲間と協力し合って一つの活動をつくり上げていく同僚性」を育成する教育プログラム開発の一環に位置づくものである。なかでも、本研究では、一連の教育プログラムにおける評価システムの構築をめざすことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、以下のような方法で進めることとした。

- (1) 研究授業を実施し、学習者同士が「活動を通して得られた身体感覚の気づきや感情」「グループやペアでの活動の活性化や深化を促す有効な言葉かけや行動」などについて互いに考えたことや発見したことを語り合う「シェアリング」の仕組みを試行的に設定する。研究資料として、授業での学習者の内省文や学習記録を収集する。
- (2) (1)の研究授業で得られた学習者の言葉や行動をKJ法によりカテゴリーを抽出して分析したり、SPSS Text Analysis for Surveys 3.0を用いてキーワードを抽出して分析したりする。学習者の自己評価行為や学習者同士の相互評価行為に着目し、それらをふりかえる内省文が、授業中のどんな状況について書かれているかを考察する。

- (3) (2)により明らかになった学習者の自己評価行為及び相互評価行為とその作用に着目し、間身体コミュニケーション力が向上するためには、「どんな状況でどんな行動ができることが望ましいか」を明らかにする。

- (4) (3)により明らかになった「望ましい行動」をもとに、学習者による自己評価及び学習者間での相互評価のための評価項目を設定する。

- (5) (4)により設定された評価項目を用い、学習者の自己評価・相互評価及び教員による評価を組み合わせた評価システムの試作への手がかりを得る。

本研究では、より多くの事例を確保するため、研究代表者(廣兼)と研究分担者(大橋・上越教育大学)の両名が研究授業の場を提供し合う。また、考察の妥当性を保障するため、互いが収集した質的データの分析結果を検討し合う。また、互いの研究授業の分析をスーパーバイザーとしてチェックし、分析結果を再検討する。

4. 研究成果

本研究では、研究代表者及び分担者がこれまで継続的に取り組んできた教員養成課程入門期の間身体コミュニケーション力育成プログラム研究の成果をもとに教材を構成し、「体ほぐし」「レクリエーションゲーム」「レクリエーションダンス」を中心的題材とした体育授業における評価システムの構築に取り組んだ。

本研究で構築する評価システムは、「学習者の自己評価」「学習者同士の相互評価」「教師による評価」の3種から構成することとした。このうち、本研究で作成・試行・検討ができたのは、「学習者の自己評価」「学習者同士の相互評価」である。

本研究では、研究授業を実施し、毎時の学習過程における学習者の自己評価活動及び相互評価活動の策定と評価ツールの設計に取り組んだ。

研究授業の対象は、平成22(2010)年度に実施したA大学教育学部における教養教育科目「スポーツ実習Ⅰ」の授業及びその履修者である。A大学教育学部1年生を対象とした「スポーツ実習Ⅰ」の授業は、履修者を1班あたり30名程度の6班に分けて「陸上運動」「器械運動」「球技」「体操・表現運動」の4領域でローテーションを組み実施されている。本研究は、そのうち「体操・表現運動」領域の授業を対象とした。

実施期間：平成22年4月27日～7月27日
全4時間の授業を6回反復して実施した。
対象者：S大学教育学部1年生176名及び科目等履修生1名(男子65名 女子112名)

計 177 名
実施場所：A 大学柔道場

研究授業にあたり、評価項目は、学習者の内省文を手がかりに、「学習者自身の自己受容」「他者受容」「他者理解」の観点から、「どんな状況下で、どんな行動ができればよいか」が明示できるように設定した。具体的には、以下の項目を設定し、研究授業の際に学習者に提示した。

- (1) 仲間と楽しく授業に参加することができる。
- (2) 仲間の体を大切に丁寧に関わることができる。
- (3) 仲間の意見に耳を傾けたり支持したりできる。
- (4) 課題の達成に向けて仲間と積極的に意見を出し合える。
- (5) 仲間に声をかけることができる。
- (6) アイコンタクトを使って仲間と一緒に動くことができる。
- (7) 表情や動きから相手の気持ちを感じることができる。
- (8) 試行錯誤しながら動きを工夫できる。
- (9) 仲間を励ましたり支援したりできる。
- (10) 仲間と一つになったように感じられる。

これらの目標の達成に向けて、毎時の授業のテーマを設定し、一つひとつのテーマが単元全体の目標の達成に向かって段階的に積み上げられていくように展開を構成した。

そして、単元全体の目標の達成へ学習者の意識を向けるために、毎時の授業の冒頭にその時限の活動についてのオリエンテーションをおこない、単元全体を通しての達成目標を模造紙に書いて毎回掲示した。さらに、毎時のオリエンテーションでは、毎時の授業のテーマを伝達し、その時間の活動が総体として何を身につけることをねらいとしているのかを明示した。同時に、その日の授業でどんな活動をするのかについても冒頭のオリエンテーション時に提示した。その際、個々の活動が何をねらいとし単元目標のうち主としてどれを達成することを期待されて設定されているのかについても伝達した。

研究授業では、具体的な評価ツールとして、「今日の学習記録」シートを作成し、毎時の活動後にふりかえりの時間を設定して、活動内容、自己評価、各達成目標に関して、できるようになったことや今後の課題などを記録するようにした。

また、単元末には、学習者自身が全ての記録を綴じたものを読み返し、自分の記録の変化を分析しながら総括的な自己評価をおこなうという課題を設定した。

研究授業の実施後、本研究で設計した評価ツールを学習活動の中でどのように提示し活用すれば学習者の主体的な自己評価活動

を促すことができるかについて考察した。考察にあたっては、授業終了時の学習者の内省文や学習記録を資料として用い、SPSS Text Analysis for Surveys 3.0 を用いて分析した。

単元末課題の一つに「毎回の授業の冒頭で『今日のテーマ』や活動の目標を聞いたことは取り組みの姿勢に何か影響を与えたか。与えたとすればどんなことだったか。」という設問を設定し、学習者 177 名全員の回答を得た。そのうち、「影響を与えた」と回答したのは 159 名であり、全体の 89.8% を占めていた。したがって、目標やテーマの提示は殆どの学習者に対して何らかの影響を与えていたといえる。影響を与えた」と回答した 159 名の内省文からどんな影響だったかに関する記述を拾い上げ、分析した。

その結果、学習者の内省文から以下の【 】に示す 25 の主題を抽出することができた。

【活動の意味を理解】【めざす方向が明確】
【何に気をつけて活動したらいいかわかる】
【自分なりに考えて行動できる】【どうしたら達成できるか考える】【随時テーマを確認できる】【意識して行動できる】【ふりかえりの観点が明確】【自信をもってふりかえることができる】【到達度の確認ができる】【達成感・満足感が得られた】【授業を受けっぱなしにならない】【意味のある活動になる】【何かを学ぶ】【自分の将来につなぐ】【活動内容とテーマのつながりに気づく】【皆で目標を共有】【一体感がうまれた】【授業に取り組みやすい】【積極的に取り組む】【自主的に取り組む】【スムーズに行動する】【気持ちの切り替えができる】【一つひとつの活動に集中できる】【活動にメリハリがつく】

各カテゴリーに分類された学習者の内省文の典型例は以下の通りである。

【活動の意味を理解】

「活動の目標があることで一つ一つの活動をする意味がよく分かり取り組みやすかったです。」

【めざす方向が明確】

「目指す方向性が明確になった。また、漠然と活動に取り組むのではないので、反省もしやすかった。」

【何に気をつけて活動したらいいかわかる】

「目標を明確に持つことが出来たので、どんな所に気を付ければいいのか、周りとの様にコミュニケーションを取ればいいのかなど、活動する上でのヒントになりました。」

【自分なりに考えて行動できる】

「授業の冒頭で今日のテーマや活動の目標を聞いたことでそのことを意識して授業に取り組んだので、ただ単に言われたことをするのではなく、自分なりに考えて行動することができました。」

【どうしたら達成できるか考える】

「授業の冒頭で目標を聞くことで何のためにしているのかが明確になり、自分で目標が達成されているのかを考えたり、どう工夫するとその目標に近づけるのかを思考するようになった。また、目標を聞くことで目指すものができ、一生懸命さが自分の中で増したように感じた。」

【随時テーマを確認できる】

「今日のテーマが授業中ずっとホワイトボードに書いてあったので、随時テーマの確認をすることができました。」

【意識して行動できる】

「授業の内容やねらいがはじめから分かっていることで目標を授業中に意識してその達成に励んだり、前の時間に足りなかったところを考える時間ができ、それを克服することができた。」

【ふりかえりの観点が明確】

「今日のテーマや活動の目標を聞いたことで、今日はこういうことをするんだという見通しが立つし、そうゆう風に行動できるかなと確認できた。」

【自信をもってふりかえることができる】

「今日のテーマや活動目標を毎回聞くことでその活動では特にどんなことに重点をおこう、と前向きな姿勢が出来、また記録にも自信をもって書くことができた。」

【到達度の確認ができる】

「テーマを最初に聞いておくことで、授業内容の意味を理解でき、より積極的に取り組むことができました。自分が目標に到達できたかどうか、どこまで目標に近づくことができたかどうか考える機会ができよかったです。」

【達成感・満足感が得られた】

「どんなことに気をつけてたら良いかが分かりました。目標を持った取り組みにつながり、こんなことを感じながら授業を進めればというイメージが持てました。そのため取り組みを実行した時自分は目標としていたことを感じているという達成感や満足感が得られました。」

【授業を受けっぱなしにならない】

「目標を授業の最初に聞くことで、90分間の授業の中で大切にすること、自分のすべきことが認識できると共に、授業の最後に目標に対して自分を見つめかえすことが出来たので授業を受けっぱなしにすることがなかった。」

【意味のある活動になる】

「授業の初めに目標を決めることにより先生が何を意図してこのような授業をやっているのかが明確になり、どのようにしたら上手くいくかも明確となり、より意味のある活動ができた。」

【何かを学ぶ】

「今日のテーマや活動の目標を明らかにす

ることによって、ただ楽しむだけではなくこの時間も授業であり何かを学ばなければならないということを意識できた。授業の最後に学習記録を書く時になってこの時間の自分は目標を達成できたのだろうか振り返ることが多かった。」

【自分の将来につなぐ】

「テーマと目標、そこから達成できる内容を説明され、今日のテーマをクリアしたらこういう目標が達成できるんだなと思っても熱心に授業を受けることが出来ました。これからの教育実習、基礎体験活動での分野でも役立つと私は考え、毎回のテーマの自己の達成基準などを考え授業の後などで反省するようにしていました。」

【活動内容とテーマのつながりに気づく】

「毎回授業の終わりに振り返っている時、あ今日このテーマに基づくこの内容になるのかと気付かされることがあり次の授業に前回のテーマや目標をふまえて臨むようになりました。」

【皆で目標を共有】

「影響は与えたと思う。目標を明確に定めたことに対してみんなの焦点が定まり、その達成に向けて一丸となる、という雰囲気である。」

【一体感がうまれた】

「何を意識して活動に取り組めばよいか分かり、ひとつひとつの活動をしっかり取り組めた。またみんなで共通の意識をすることが出来るため、一体感がうまれたと思う。」

【授業に取り組みやすい】

「冒頭で今日のテーマを聞くことによって活動内容の軸がぶれず進んで活動に参加することができた。何のためにこの活動があるかがはっきりしていたため授業に取り組みやすかった。」

【積極的に取り組む】

「その日にどんな目標を持って、どのような活動をするのかということが明確に提示されていたので、より積極的に素早く動くことができたと思います。」

【自主的に取り組む】

「今日のテーマや活動の目標を聞くことにより、何とか自分なりに達成したいという心意気のため、進んで自分から仲間へ声をかけたり、自由に動いたり、自主的に取り組むことへの強いやる気が湧いた。」

【スムーズに行動する】

「今から何をするのかわかることでスムーズに動くことがわかりました。また、テーマや目標を聞くことで、活動の目的が明確になり、活動を行なうことで、どんなことを学ぶことができるのかわかり、より授業に目標を持って参加することができました。」

【気持ちの切り替えができる】【一つひとつの活動に集中できる】

「事前に説明されることで、次の行動への気持ちの切り替えがしやすかった。また、それによって1つひとつの活動に対して、すぐ集中することが出来た。」

【活動にメリハリがつく】

「目的が明確になり何に気をつけて活動すればよいか分かり目的意識をもって活動することができた。次やることがわかっているためメリハリをつけて活動することができた。」

これらの典型例の文脈に着目すると、抽出された主題がどのような構造を形成しているかを明らかにすることができる。そこで、文脈の展開にそって各主題を並べてみた。学習者の内省文から抽出された主題を授業の展開にそって時系列に並べ、授業の展開にそって学習者の取り組みの可視化を試みた。

その結果、毎時の授業で自己評価項目を提示し、自己評価活動を実施することにより、学習者は、授業における個々の活動の意味が理解でき、自分なりの目標や達成基準を設定し、達成するかを考えながら活動するなど、主体的に授業に取り組むことができるようになったことがわかった。

また、評価項目と達成目標とを一体化することにより、学習者が自分自身の到達度を確かめながら自信をもって成果をふりかえることができるようになったこともわかった。

以上のことから、毎回の授業の冒頭で授業の達成目標やその日のテーマを提示したことは、学習者の取り組みの姿勢に肯定的な影響を与えたといえる。その内容を(1)～(8)にまとめる。

- (1)自分なりの目標や達成基準を設定し、どうしたらそれを達成できるかを考えながら活動に取り組む主体性が学習者に生まれた
- (2)ふりかえりの観点が明確になることで自分自身の到達度を確かめながら自信をもって成果をふりかえることができた
- (3)ふりかえりの結果、学んだ達成感や満足感を得、意味のある活動になったと感じられた
- (4)授業で学んだことを自分の将来につなぐようとする意識をもてた
- (5)皆で目標を共有できたことによりクラスやグループに一体感が生まれた
- (6)積極的または自主的に取り組もうとする姿勢が生まれた
- (7)何をしたらいいのかがわかっているためスムーズに行動でき、次の活動へと気持ちの切り替えができた
- (8)一つひとつの活動に集中でき、活動にメリハリがついた

また、学習者間の相互評価を導入した研究授業を試行し、その成果を論文にまとめて発表するとともに、日本教育大学協会保健体育・保健研究部門全国創作舞踊研究発表会で、ワークショップ形式で発表した。

ワークショップでは、仲間とコミュニケーションするために有効な「身体や言葉による働きかけ」がどんなものであるかを探り、振り返るために、学習者同士が、身体活動の後に交流した仲間とディスカッションする時間を設定した。ワークショップの実施状況は以下の通りである。

実施期間：平成24年12月22日

対象者：日本教育大学協会加盟大学学生17名及び同教員3名 計20名

実施場所：B市民文化会館

ワークショップでは、身体コミュニケーションの出現と活性化をねらいとしたレクリエーションゲーム、フォークダンス、リズムダンスを実施した。中でもグループの一員としてゲーム全体の雰囲気や勢いをつくり出す体験のための教材である即興的な身体表現「ザブンゲーム」と、グループが一体となって活動する体験のための教材である「風船バレー」では、グループの成長をねらい、同一メンバーの小グループで活動した。それにより、ワークショップ型の学びとして、企画者の意図にしばられず、活動が展開されることを期待した。活動の終盤には、活動を共にした小グループでのディスカッションと、グループのディスカッションの内容を全員で共有する場とを設定した。

ディスカッションの前には、ふりかえりシートを配布し、各自の感想を記入させた。最初に示した今日の目標「誰とでも分け隔てなく、一緒に楽しく活動すること」を示した後、各教材について、「やってみて仲間と楽しく交流できたと感じた活動に○を、仲間と距離を感じたり難しくてやりにくかった活動に×を記入する欄」と「それぞれの教材についての感想を書く欄」を設定した。そして、下記の3つについて自由記述の欄を設定した。

- (1) ザブンゲームの中で、楽しく行うために自分が工夫したことはありましたか？
- (2) 風船バレーでラリーを続けるために仲間とどんなはたらきかけをしましたか？
- (3) 仲間の感想を聞いて気づいたこと・学んだことがあったら、是非教えてください。

上記(1)～(3)の自由記述欄における学習者の内省文を文章ごとにラベル化し主題ごとに分類した。その結果は以下の通りである。

「ザブンゲーム」では、「意外な流れになるようにアクションする」「色々なザブンを発展させてつけていくとより面白かった(小さいザブン・低いザブン)」「切り返しをあえて行う。」「その方が相手がワァ〜ってなっていたので、声も出やすかったかなと感じました」などの記述から、学習者が活動を楽しめるためにバリエーションや間の工夫を行っていたことがわかった。学習者は、これらの工夫がゲームの流れをつくり出すことに気付いていたといえる。また、「自分からアクションを起こそうとする意識」「大きくアクションをする」「表情や言い方を楽しく使って、グループ全体がもりあがるような雰囲気をつくった」など記述から、積極的に大きくアクションを起こし、楽しい雰囲気を作ろうとする工夫をしていたことがわかった。学習者同士が相互に自らの工夫によって働きかけ合うことで、グループの活動が楽しくなり、その雰囲気を通して、コミュニケーションが形成されていったことが推察できた。

一方「風船バレー」では、グループが「ラリーを続ける」という明確な目標を共有し、その達成に向かって声かけ・言葉かけとパスの工夫がなされていたことがわかった。「パスする相手の名前を大きな声で言う」「やりやすいように簡単な名前で統一しました」「『うまい!!』『ナイス!!』など、プラスの言葉かけをすること」「相手の方を見て(体の向き)、とってほしい感じをアピールする」「風船の滞空時間を長くする」などは、その典型例である。

パスの工夫のなかには、「あえて中継を使うために、パスする相手の名前とは別のところへとばしました」「名前を呼んで、まわりの人も反復したり、中継を呼びかけたりしました」というものもあった。意図的に中継プレーを利用してパスをつなぐといった、全員がゲームに参加するための工夫が試みられていたことがわかった。

ワークショップの結果、学習者は、教材の特性に応じて、グループ活動を活性化させるための行動やグループ全員が参加できるような言葉かけを工夫し、意図的に行っていたことがわかった。また、今回のワークショップでは、各教材は、筆者らが設定したルールをもとに始められたのであるが、そのルールの活用は参加者に委ねられ、上記に示した工夫の結果、各グループにおいて予測以上のルールの改変・発展がみられた。

「誰とでも分け隔てなく、一緒に楽しく活動すること」を目標に、状況に応じてルールを改変・発展させながら、動きのバリエーションや間を工夫し、声かけ・言葉かけを行い、大きなアクションやアイコンタクトを用いることによって、学習者相互に

良好な間身体コミュニケーションが形成されていくことが明らかになった。

今後は、調査結果の分析を進め、学習者が相互に望ましい言動であると評価する言動を明らかにしたい。その結果をもとに、「学習者自身の自己受容」「他者受容」「他者理解」の観点から、「どんな状況下で、どんな行動ができることが望ましいか」に関する、教師による第三者からの評価ツールの作成を試みたい。

とりわけ、体ほぐし領域には教員による具体的な評価項目や評価ツールが確立されていないため、今後の本研究の進展による評価項目や評価ツールの開発が期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①大橋奈希左, 廣兼志保, レクリエーション活動とダンスで交流しよう!, 舞踊教育学研究, 査読無, 第15号, 2013, 掲載確定

②大橋奈希左, 廣兼志保, 身体コミュニケーション, 舞踊教育学研究, 査読無, 第14号, 2012, 38-39

③廣兼志保, 大橋奈希左, 大学体育における学習者の自己評価を促す授業実践の試み-教員養成課程学生の間身体コミュニケーション力の育成に向けて-, 島根大学教育臨床総合研究, 査読無, 第11巻, 2012, 27-41

〔学会発表〕(計2件)

①大橋奈希左, レクリエーション活動とダンスで交流しよう!, 日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門第32回(通算60回)全国創作舞踊研究発表会, 2012年12月22日, 前橋市民文化会館(群馬県前橋市)

②大橋奈希左, 身体コミュニケーションワークショップ, 日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門第31回(通算59回)全国創作舞踊研究発表会, 2011年12月17日, 大分市コンパルホール(大分県大分市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廣兼 志保 (HIROKANE SHIHO)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号: 00234021

(2) 研究分担者

大橋 奈希左 (OHASHI NAGISA)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号: 90283043